
保健室の住人：3年Z組銀八先生系～高杉晋助的嗜好徒然～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保健室の住人：3年Z組銀八先生系〜高杉晋助的嗜好徒然〜

【Nコード】

N40650

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

なにもかも、お初づくしです。

高杉晋助がメイン

そして、舞台は3年Z組

しかも、晋助ったら！

何気にキングオブ保健室っぽいといいますが…個人的にかなりうらやましい設定だったり、じゃなかったり…

保健室でのほんの10数分くらいのエピソードですが、終盤急に甘味激増↓血糖値上昇するので、ご注意されたし（笑）！

志を同じくする小豆久遠様の『万恋愛短篇集』中の

“保健室の住人”にインスパイアされ、一気に生み出された一篇であります。

小豆久遠様の作品はクラスメート目線で綴られ
草紙屋本舗のものは高杉目線で綴っております。

小豆久遠様の“保健室の住人”<http://ncode.syosetu.com/n9578n/6/>”とも併せて、ご覧いただきたくお願いいたします！

（前書き）

こちらの作品は

小豆久遠様作『万恋愛短篇集』より“保健室の住人”を
ベースに作成させていただいたものです。

<http://ncode.syosetu.com/n9578n/6/>

小豆久遠様には快く公開を承諾いただきました。心より御礼申し上げます。

…ん。

…なんだよ、誰かいんのかよ…

ベッドの仕切カーテンごしに、ごそごそと人影が動いているのが
うつすら見えた。

「いつ…！いでででで…！もう、体育なんて消えてしまえ」

どうやら女子らしい。時々、泣き言をぐちゃぐちゃもらしながら、
保健室内をうろろろしているようだ。

…痛えなら黙って静かにしてりゃあ、いいのによ。

「はあーあ！先生え、早く戻ってきてよ」

ぼす。小さくソファーがきしむ音がする。女子が横に倒れ込んだ
のか。

ふんふん鼻をならしながらなおも泣き言を言い募っている。

「ダルい、痛い、眠い、死んじゃう！誰かぁ！救急しゃ…」

…っせえな、死にそうなヤツがそんなでけえ声で騒げつかよ！

俺はイラッとしながら、ベッドに起き上がりカーテンを思い切り
よく開けた。

「…おい」

ソファーに寝っころがってうだうだ騒いでいた女子が、俺の声に
びくりと身を起こす。

「うつせーよ、静かにしろ」

目をまんまるに見開いて、俺を吃驚仰天の面持ちで凝視している。
「た、高杉くん…」

驚愕のあまりか、それとも普段からそんな風なのか、口をぱくぱくさせてあせりながら俺に向かって謝ってきた。

「起こしちゃった？ごめんね？」

体育の授業中に怪我をしたのか、体操着のままソファーに腰掛け
ている。どうやらびっくりしたようなまんまるの目はもともとの
ものらしく、目をくりくりさせながらそのまま俺に話しかけてきた。

「…具合、悪いの？」

バカか。ほんとに具合が悪いなら、こんなとこにいねえで病院に
とつとと行くだろうが。

「そんなわけあるめえ」

俺がそう言い捨てると、そうだよ、とかなんとか呟きながら、
ちよつとしょぼんとする。

「用がねえなら、出てけ」

だいたい女子ってえのは、いるだけでめんどくせえ。

すぐ泣き言をぬかすし、うつとおしいだけだ。俺は、女子に向か
って手を振って追っ払おうとした。

「いやいや、用はあるんだよね…」

女子が、ふるふると手をふってふざけたことを言う。

「先生、どこ行っちゃったか知らない？」

…知るかよ。

誰もいねえから、わざわざここに来てんのに…こいつやっぱバカ
だ。

「知らねえ」

女子の問いに木で鼻をくくったような答えを返す。…高杉くん
でも知らないのか、とまたぶつぶつ呟く女子。

「うーん、困ったな…」

いや、俺は一向に困らないね。強いて言えば、おまえのその存在が困るだけだ。そんなことを思っていたら、女子が訳のわかんないことを言ってきた。

「…あのさあ、静かにしてるから先生が来るまで、ここに居させてもらってもいいかな…？」

なぜ俺に聞く？しかも、俺がもし許可しなかったらどうすんだ？あまりのバカバカしい問いに心底嫌気がさしてきた。こいつ、つまみだしてやろうか…。

思わず俺は舌打ちをしながら、その女子に近づいていった。

「ああ？」

さつきから高杉くん、高杉くんとなれなれしい女だと思っていたら、どうやらクラスメートらしい。

「…おめえは、確か同じクラスの…」

俺がそうもらすと、女子はぷつとふきだしながら今更？とか、気付くの遅いよ！と俺の腕をぱしッと叩いてきた。

「うん。ホラ、隣の席の…」

ああ、そうね…

あんまいったことねえクラスだが…確か俺の隣の席は、なんかやけにふわふわした感じの女子だったことを思い出した。

「フン…」

まあ、そんなこたあどうだっていい。今はとりもなおさず、この女を保健室から一刻も早く追い出すだけだ。

「ほオ…派手にやったじゃねえか」

女子の両膝は血まみれだった。どうやら勢いあまって地面に突っ込み、膝を強打したらしい。思い切りよく裂け、砂利や小石にまみれてぐちゃぐちゃになっている。傷口を見降ろして、情けなさそうな顔になった女子を見て俺はせせら笑った。

「あー、うん。ハードルでこけちゃって…。あ、今、体育の時間でね、女子は陸上で、男子はバスケだったかな」

女子は意味もなく自分の傷口をぱたぱたと煽ぎながら、俺に説明をした。まあ、そんな説明もどうだっていいことだ。俺が黙っていると、女子が話を続けた。

「私って運動音痴でさあ…」

だろうな、加えて言えば状況把握能力や、判断力も著しく欠けていそうな気がするぜ。

「コレ、手当てしないとヤバイよねえ？」

まあしなくても、死にやあしねえだろうがよ。

「…私、自分じゃできないからな…」

ってか、めんどくせえな、ほんとに。ああ、もうほんとつざつてえ。

「立て」

俺の言葉にまたもやびくつと女子がこちらを見た。

「そんな砂まみれじゃ、菌が入って化膿するぞ。外できれいに洗い流してこい」

呆然と俺の言葉を聞いている女子に向かって、俺は女子の腕をひつつかんで無理やり立たせ、早くしろ、と促す。女子はこくりと頷くと保健室の外にある水道の方へ歩いていった。

じよろじよろと水が流れ出る音が聞こえてきた。

女子が身をかがめて膝を水の流れにさらしているのが見えた。

「うへえ…グロい」

俺の方を振り返りながら、顔をしかめてみせる女子。

いいから早く洗え。

俺が舌打ちをすると慌てて蛇口栓をひねって水の量を多くした。

痛い痛い、と泣き言を言っているのを尻目に俺は保健室の棚を家探しする。そうこうしているうちに、ひんひん言いながら女子が室内に戻ってきた。

「それくらい傷で…情けねえ」

俺が心底バカにした口調で呟くと、女子が言い返してくる。

「だって私は女の子だもんね」

かえすがえすもやっぱ、こいつはバカだ。女子だからなんだつてえんだ。その言葉を聞き、思わず鼻で笑ってしまう。

「座れ」

命令口調が不満なのか、俺の方をちよつと非難がましい目で見ながら女子が丸椅子に座る。おとなしくしているだけ、まだいい方が「見せる」

そう言つと、女子は心底驚いた風情で胸をおさえている。何考えてんだ、この女は…

「え、え？何するつもり？」

安心しな、おめえのようなバカには興味なんかねえよ。

「おめえは底なしのアホだなあ。てめえは何しにここに来たんだよ？」

手当てだろうが。このバカたれが…

「え！！！！手当！！！！？」

やつと気付いたか…この鈍チンが。バカ女が驚いている間に、俺は棚の中から消毒液やガーゼを出して準備万端だ。

「いつまでもここに居て、めめめそれわれちゃかなわねえからなあ…。終わつたらさつさと出ていけよ」

やつと俺の意図を理解したのか、ようやく安心した顔をしている。目があうとにこり、と笑った。しかも調子づいてきたのか、俺がガーゼを切り分けているとくだらねえことを言ってきた。

「…けど、高杉くんが手当てつて。に、似合わなっ…」

図々しい口調に、イラッと俺は睨みつける。途端に女子はしゅんとして謝ってきた。

「す、すみません。なんでもありません…」

ちよつとおもしれえな、こいつ。俺の言葉ひとつに態度がころころ変わる…

「次はねえと思えよ…？」

おもしろくなって、わざと胆が冷えるようなことを言ってみる。女子はすっかりうなだれて、こくこくとうなずくばかりだ。腹の

底から笑いがこみあげてきそうになるのを抑えて、消毒液の容器の口を開け、なかみを傷口に垂らそうとした。

「待って待って待って!!」

さっきまでしょげていたかと思ったのに、目の前の女子がいきなり大声をあげた。

「…何だ？」

「直接！？もつとこう…ほら脱脂綿とかに染み込ませて、ポンポンってやるんじゃない？」

…ぬるいこと言いやがって。うんざりしながら俺は言う。

「最終的には消毒されてんだ、たいして変わりはあるめえ」

女子の膝を押さえて、消毒液を垂らそうすると足をじたばたさせて嫌がる。

「ある！絶対変わりはある!!」

「るせー！ヨーチンぶっかけっぞ！」

俺の脅しに、さらに女子のじたばたは大きくなる。

「いやあ！あれかなりしみるじゃん!!」

…こいつ、ほんとおもしれえ。俺の言葉に全身で反応していやがる。

「だったら黙れ」

女子は静かになった。それを確認して俺は容赦なく消毒液を垂らしてやった。

「…いつ…たぁいいい!!!!」

確かにこれだけの傷なら相当しみているだろうよ。膝の上で両の手を握りしめ、女子はまぶたを固く閉じて痛みに耐えようとしていた。さっきまでは青い顔をしていたのに、今は頬が真っ赤だ。

「我慢しろ」

うつ、と言いながら目をぬぐう女子。そんなに痛かったとは思えないが。俺は消毒液をティッシュで拭き取り、傷口にガーゼをあてがい、素早くテープで止めた。もう一方の膝も同じように処置をする。視線を感じて、女子の方を見ると涙がにじんだ眼をくりくりさ

せながら礼を言ってきた。

「ありがとう、高杉くん」

使った消毒液やガーゼの残りを片付けている俺に向かって、続けて訳のわからないことを言ってくる。

「さすが、保健室の住人…ってか、もうただの住人じゃないよね？むしろ保健室マスターだよ！」

「なんだそりゃ…。でもまあ、素直に感謝の意を示す態度は気に入った。」

「クラスに、まだおめえみてえな鈍くせえ奴がいたとはな」

そう言って俺は笑った。俺の言葉に、ふんと鼻をならしながら女子が言い返してくる。

「失礼な…。まあ、事実だけだね」

そうしてにこり、と笑ってこんなことを言ってきた。

「あ、何かお礼させてよ！ジューズ位なら奢るよ？」

「お礼か…そうか、礼か。この俺がこれだけしてやったんだ。ジューズごときで茶をにごされちゃ、しょうがねえ。」

「いらねえよ」

ジューズを断り、俺は自分の思いついたことに思わずニヤリと笑いをもらしてしまう。そのまま女子に一気に近付き、右手の親指を顎にかけた。

やわらかな感触に触れ、思っていた以上に小さな顎を軽く持ち上げて、ぐつと俺の傍に引き寄せる。そのまま女子の桜色の唇に、俺の唇をのせる。少し開いていた唇の間に、すかさず小さく舌をいれて唇をぺろりとなめてやった。瞬間、体を離しながら女子の耳許でゆっくり囁く。

「礼は、これで勘弁しといてやらア」

そして俺は、ニヤリともういちど笑って啞然としている女子を残し、保健室を後にした。

どこかで、チャイムが聞こえる。

俺が保健室を立ち去ってしばらくしてから、室内から大きな声が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065o/>

保健室の住人：3年Z組銀八先生系～高杉晋助的嗜好徒然～

2010年10月19日20時40分発行